

平成15年秋季特別展

弥生文化研究への熱いまなざし



Rokuji Morimoto (1903-1936)



Yukio Kobayashi (1911-1989)

森本六爾、小林行雄と佐原真



Makoto Sahara (1932-2002)

平成15年10月4日(土)~11月30日(日)


主催:大阪府立弥生文化博物館、毎日新聞社、毎日放送

後援:(財)大阪21世紀協会 協賛:堺女子短期大学、(株)国際交流サービス

考古学セミナー◎場所:1階ホール 時間:午後2時~4時(受付:午後1時~)*全回参加者には修了証と記念品を贈呈いたします。

- | | |
|--|---|
| 第1回/ 10月5日(日) 水野正好(奈良大学教授)
「今日の考古学を生んだ森本六爾」 | 第4回/ 11月16日(日) 檀上重光(元神戸新聞編集局長)
「異質の神戸っ子-小林行雄」 |
| 第2回/ 10月12日(日) 難波洋三(京都国立博物館考古室長)
「銅鐸研究と佐原真」 | 第5回/ 11月23日(日) 春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授)
「昭和の弥生文化研究-森本・小林・佐原の系譜」 |
| 第3回/ 11月2日(日) 工楽善通(大阪府立狭山池博物館館長)
「考古学に秩序を与えた土器集成」 | |



 大阪府立弥生文化博物館

●開館時間:午前10時から午後5時(入館は4時30分まで) ●休館日:毎週月曜日(但し祝日の場合は開館、翌日火曜日が休館) ●入館料:個人=一般600円(480円)、65歳以上・高大生400円(320円)、小中学生・障害者手帳を持つ方は無料 【()内は団体料金 20名以上】 ●所在地:〒594-0083 和泉市池上町443 電話=0725-46-2162 FAX=0725-46-2165 http://www.kanku-city.or.jp/yayoi/ ●交通:JR阪和線「信太山」駅下車徒歩7分、南海本線「松ノ浜」駅下車徒歩20分 駐車場:普通車80台、大型バス7台無料

21世紀の今日、弥生時代が農業社会であったことは、多くの人が知っています。

しかし昭和のはじめ頃、弥生時代とはどのような時代なのか、不明なところがたくさんありました。

このような時代に、弥生文化と農業のかかわりに光をあて、

新しい弥生文化研究に果敢に取り組んだ若い考古学者がいました。森本六爾です。

そこで弥生文化博物館では、平成15年が森本六爾の生誕100年にあたることを記念して、

森本六爾、森本の研究をたすけた小林行雄、小林に教育を受けた佐原真の偉大な3人の考古学者を紹介します。

弥生文化研究に向けた、彼らの熱いまなざしを感じてください。

森本六爾 (1903~1936年)

Rokuji Morimoto

明治36年奈良県桜井市生まれ。旧制奈良県立畝傍中学校を卒業後、小学校の代用教員になるが、21歳の時に上京。健康を犠牲にして研究をすすめたために32歳で夭折した。夫人ともども考古学に殉じた短い一生は、松本清張の小説『断碑』のモデルになる。森本は弥生時代が農業社会であることを提唱。数多くの研究は、今日の弥生文化研究の基礎となる。新しい考古学を目指す森本のもとには、全国から俊英の青年考古学徒が出入りした。小林行雄はその一人。森本は昭和6年、28歳の時に病をおして一年ほどパリに遊学し、帰国後の新しい視点は伝統的な考古学界に新風をもたらした。『放浪記』で有名な林芙美子とのめぐりあいは、パリ時代のひとこまである。

【主な展示物】

- 唐古弥生土器文様の拓本
- パリ時代漢代遺物調査の記録
- パリ時代の日記
- 遺稿「弥生式石器と弥生式土器」



林芙美子からの書簡

小林行雄 (1911~1989年)

Yukio Kobayashi

明治44年神戸市生まれ。兵庫県立第一神戸中学校時代に考古学に関心をもち、建築家をめざして入学した神戸高等工業学校時代から本格的に弥生土器研究をはじめた。昭和10年、浜田耕作の引き立てにより京都帝国大学考古学教室の助手になり、戦後、講師、教授をつとめた。考古学一路の人生である。弥生文化研究はおもに戦前の仕事である。森本六爾とは雑誌『考古学』をつうじて交流をふかめ、彼の弥生研究をたすけた。森本が亡くなると、その遺志をつぎ「弥生式土器集成図録」を完成させた。また弥生時代の実像を証明する唐古遺跡の報告書をまとめた。戦後は古墳時代の研究をすすめ、同範鏡論から古墳誕生の謎に挑戦して注目された。小林の学説は精緻をきわめ、後進には考古学の厳しさを教えた。

【主な展示物】

- 神戸高等工業学校時代の弥生土器カードと文献書写集
- 「大和唐古弥生式遺跡の研究」版下
- 三角縁神獸鏡同範鏡の分有関係図



「弥生式土器集成図録」の縮小原図

佐原 真 (1932~2002年)

Makoto Sahara

昭和7年大阪市生まれ。明るく純真で、いつも唇に歌があり、わかりやすい考古学を提唱。奈良国立文化財研究所をへて、国立歴史民俗博物館の館長をつとめた。佐原には二人の恩師がいる。一人は山内清男。15歳の時に、「中学生の為の人類学講座」で出会い、目の前で粘土の上でころがした見事な縄文を見せられ、考古学のとりこになった。大阪外国語大学でドイツ語を学び、京都大学大学院で考古学を専攻。27歳の時に、もう一人の師である小林行雄に抜擢され、『世界考古学大系』2に「銅鐸の鑄造」を執筆。以後の銅鐸研究に大きな影響をあたえた。佐原の考古学は遺物学に始まるけれども、考古学の成果から環境問題や戦争などを見つめ考えるようになり、後半には自由・平等・平和をめざす学問となった。

【主な展示物】

- 旧制中学時代手製考古遺物図集
- 佐原真作縄文のより紐
- 「銅鐸の鑄造」の草稿
- 新銅鐸分類発見の喜びを伝える手紙の下書



日々出張のカバン